

ビッチ島でやることは一つ！



うさぎロボ 著

一章 美地島移住、即ガチハメ

昔から、気にしていたことである。

高校でそれがバレると、あだ名は「アナコンダ」になった。本名が蛇田一郎であるから、大蛇が連想されたのだろう。

男子便所で陽キャ連中に見られて、その場で「今日からアナコンダだ」という話になった。

オタク系陰キャの一郎には、信じがたい言動だった。そもそも他人に何かアプローチすること自体がない。

みんなに「こいつのあだ名は〇〇」などと宣言するなど、信じがたい話なのだった。

ともかく、アナコンダである。

一郎の一物はゆうに三〇センチを超えていた、平時でのことだ。中学の時には、立った状態で三〇センチの物差しを抜いていて、それ以来あまり意味もないので三〇以上と大まかにしか認識していない。

当然、子供のころから巨大だった。それでいじめられてきたものだ。

いじめられずとも、クラスの男子全員のモノを集めても体積で自分のほうが大きいような化け物をぶら下げていることはとても誇れることではなかった。これが長さで倍程度でクラス一というなら自慢もできたかもしれないが、大きすぎて恥ずかしいだけだった。

ともかく、中学では目立たないようにしてどうにかやり過ごしていたが、超巨根だとバレてネタにされてからいじめられるようになるまでに時間はかからなかった。

前にやられていたクラスメートはよく脱がされていた。それもなかなかの大物持ちで、女子にやられる時など遠慮なくグイグイ引っ張られていたものだ——というか大物持ちとバレると、男子よりむしろ女子に性的に玩具にされる形になっていった気がする。

だが一郎は脱がされはしなかった。あまりにも群を抜き過ぎた化け物を出させても笑えないだろう。

ドッジボールという体裁でボールをぶつけられたり、机の中身をぶちまけられたり無視されたりと、やっていることは小学生レベルだが、それでも十分辛かった。

勇気を出して教師に相談したが、我慢しろと迷惑そうに言われただけだったのが決定打になって高校を中退した。

——ヤンキーの中退ならまた違うだろうけど、僕みたいな陰キャの中退となるとそのままニートまっしぐらかな……あーあ、一回ぐらいまともにセックスしてみたかったな。せっかくバカデカいの……

そんなことを思いながら、無為に過ごすこと一月。

数年前に結婚した一〇個ほども上の兄が、兄嫁の実家がある島に引っ越し日が来る。

一年ほど前から準備してきていた話だ。

一郎などという名前だが、一郎は次男だった。

兄は零士。ゼロの次が一なのは理にかなっているといえるだろう。

一郎と違い根っからの陽キャで、一郎同様の化け物をよく振り回して見せてくれたものだ、小学校に入りたての頃、高校だった兄が家で友人らと振り回していたのをよく覚えている。

兄のだけ別の臓器のように巨大だった。うらやましいと思ったものだが、実際同じぐらいになると

重いし薄着だと目立ちそうであまりうれしくない。

——彼女でもいて、大きいとか喜んでくれるなら別だろうけど……そんな機会どころか、セックスすることもなさそうな人生だからね。同じ兄弟でも大違いだよ。まあ、兄さんがいてよかった。これで一人っ子じゃ両親がかわいそうだ。

兄には子供が二人。五歳と二歳。かわいくて仕方ない。ロリより熟女というのが一郎の趣味だが、ロリコンたちの気持ちが二人を見ているとなんとなくわかる気がするし、こんなかわいい子らに性欲を向けるなどまったく分からない、という気もする。

ともかく、海の向こうになど住めばそうそう会えなくなる。すぐに忘れられてしまうだろう。

そんな二人を連れて、兄夫婦が挨拶に来た。

平日から家にいる一郎を不思議に思う兄に、ぼつが悪そうに説明する両親。このままニートコースではないかと二人も心配している。

兄夫婦に言っても仕方ないことと黙っていた。まだ中退から一月であり、休んだら別の高校にという話は一樣あるのだ。

と、聞いていた兄嫁がなにか考えると、意を決したように頷く。

「それなら……」

次の日には、一郎は兄嫁の実家にいた。

兄嫁百花は二六歳の美人だ。

その母は五〇少しである。実年齢も孫がいるにしては相当若いが見た目は四〇少しに見えた。

父親の方はかなり痩せて、影が薄く見えた。一郎の兄同様島の外出身で、母親と結婚して数年後に島に移り住んだという。

つまりは、一郎の兄と同じ形で島に来たわけだ。

二人とも、身内である兄夫婦より客のような立場の一郎に愛想がいい。

特に、熟女好きの一郎にはかなりストライクな爆乳熟女系の兄の義母は背中や腹を軽く叩きながらほほ笑む。

「いいわね、健康そうで。この島は男の子少ないから誰だってモテるけど、一郎くんみたいな子は特にモテるわよ」

「はあ……」

——夢みたいなのをいってるな。お世辞でも、うれしいけどさ。モテるなんて僕にはありえないし。背も低いし、小太りだしね……よくいるオタクらしいオタクさ。モテるところか一回でもやれるか怪しい……



「一郎くん、とにかくたくさん食べて体力つけるんだよ。この島の男はとにかく体力がないと大変で……」

義父——別に一郎の義父ではないが、やはり他所から来た人間はいろいろ気を遣うのだろうか。

ともかく、兄の義父の家は広い。というか三つの家がつながった三世帯住宅だ。

兄嫁の妹もいずれ帰ってくる予定らしい。

——というか、姉妹二人ともいずれ戻すつもりだったのか。家まで用意して……

ともかく、一郎はまだ誰もいない端の家の一角を借りることになった。先に他人を住まわせていいのかと少し気にならないでもなかったが、まあ空いているのだから構わないだろう。

その日は兄の義父たち、金松夫妻が住む真ん中の家で皆そろって夕食をとった。

「明日からも一郎くんはこっちで食べてね」

「お母さん、私たちもこっちがいいよ」

「それじゃ、一緒に料理してね」

「あ、当たり前じゃない。もう、別に楽しようとして言ってんじゃないって」

どうでもいいことで楽しく笑う。兄や姪っ子はともかく、美人の兄嫁やそれが一〇歳ほど年を取ったぐらいにしか見えない金松夫人や、影が薄いとかどこかやつれて見える金松夫などは割と他人寄りだ。というか夫婦は兄の結婚式以来だ。

他人が多い場所であまり話したり笑ったりは苦手な陰キャだが、隣に座った金松夫人が気を使ってくれるので家族のような感じで笑っていられる。

——ああ、かなりいい感じだ……

気弱な一郎にとっては、若い美人の兄嫁には気圧される。包容力ある年上の美熟女のほうが安心してぼんやりできる。

と、夫人が椅子をずらし、近づく。

「さあ、もっと遠慮なく食べてね一郎くん」

「あ！ はい……」

爆乳。

柔らかい素材の服ごしに、二の腕に押し付けられるビーチボール級の雌肉。一瞬ではなく押し付けられたままだ、体温すら伝わってくる。

——不味い、さすがにここで立ったらヤベえよヤベえよ……

必死で押さえる。

と、その必要もなかった。

「はぐっ！ ちょ……」

「あ」

「こら！ 千紗！」

「きゃははは！ おじちゃん隙ありだぞー！」

机の下から出てくる幼女。五歳。

「ちょ、千紗ちゃん今……」

「タマタマパンチだよおばあちゃん！ 男の子はこれでイチコロ！」

「やだ……だめよ千紗ちゃん。そこは男の子の一番大事な所なんだから……」

「千紗、こら！」

「はいはい、怒らないでよママ。この通り……千紗も同じことしちゃうからさ！」

椅子の上に立ち、バシバシと薄いスカートの前を小さな掌で叩く。

叩きつつ、ニヤニヤしながら一郎や父、祖父らを見ていく。

——ち、千紗ちゃんこんな小さいのに、はっきりわかってる。僕たちが……絶対同じことできないって。

椅子を降り、机をぐると走って祖父の膝の上に強引に座りに行く。

「えへへ、ねえおじいちゃん、おじいちゃん今千紗がやったみたいなこと、できる？」

「いや、無理だねえ」

「えー、なんで？ ここに何かついてるのかなー？」

「あ、止めなさい……はふっ」

祖父といっても六〇前である、急所握りで心臓に負担が……などと気にする年齢ではない。が、別にそんなことは千紗は考えてもいないだろう。仮に祖父が八〇近かろうが同じように握りに行きそうだ。幼女とはそういう生き物である。

小さな手が母の故郷を揉み解す。

「えへへ、なんだろうこの玉コロ二つは一、私にも万美（まみ）ちゃんにもこんなもん付いてないぞー、だって女の子じゃけんのー」

「きゃははは！ 玉コロたまころー！」

手を叩く幼女。

——こんな小さい二人でも、股間の防御力ならもう僕以上なんだ……女の子だから……それをよくわかってて煽ってくる、末恐ろしいSっ気幼女だなあ千紗ちゃんは……

考えつつ、玉竿が縮む。金パンチのダメージがまだまだ重苦しく残っている。別にそれで怒る気にはならない。いつもこの調子だし、万一の時にもナノメカ入りの薬で治せる世界でもある。

食事を終え、自分の部屋に戻ろうとする一郎。

そちらの家に入ると、夫人が追って入ってくる。

「あの子、いつもあなの？ ごめんね？」

「いえ、全然……かわいいですよ」

「そりゃ可愛いけどね……でもそこって男の子の、急所だし……よくわからないけど」

後ろ手に戸を閉め、居間に入る。

「この島ってね、大人の男の人はちゃんと女と同じぐらいいるけど、子供とか若者はほとんどいないのよ。昔からあんまり生まれえないのね、一〇人に一人ってところかしら。私の親戚にもここで生まれた男の子はいないし」

「え？ そんな事あるんですか？」

「昔呪い神が空から降ってきたせい、って伝承があるのよ。古い神社の地下に、その神様が今も埋まってるとか」

「変な話ですね……あ、いや」

「あは、変な話よ。で、何が言いたいかというところ……この島の女の子たちにとって、男の子ってすごく珍しくて貴重だから、モテるし……そのね、キンキンにも興味津々というか……あの子たちもここで住んだらますますああいうこと好きになると思うから、すごく嫌なら私がちゃんと」

「大丈夫ですよ。もしもの時も治るんだし……」

「そう、優しいのね一郎くん」

——というよりドMくんなのかな？ いいわねえ……太ってて体力もありそうだし……みんな喜ぶわよ。

とんでもない誤解をしつつ、ズボンの前を見る。

——ふむ、あの子の話じゃ、旦那さんの凄い大きいって言うから、きっとこの子も大きいんでしょうね。気になるわね。うふふ、ちょっとスイッチ入ってきたわ。

精神が高まりつつあるを感じる夫人。

この島の女たちは皆、常に心の奥底に誰かが語り掛けてくる声を聞いている。

言葉というより、意味や意志のようなものが語り掛けてくるのだ、その内容は単純だ「性に積極的になれ」という物だ。

その内なる声が、この島の女性たちを皆異様に性に奔放な、いわゆるビッチ的な性格にしている。

それも外におけるそれとは比較にならない強烈なそれだ。

す、と手を伸ばし、ズボンの前に触れる夫人。

「あっ」

「ここ、まだ痛いのか？ 念のために見せてもらおうかな？」

「いや、大丈夫ですって」

「うふふ、平気よ。五〇過ぎのおばちゃんだよ？」

「え？ 五〇行ってるんですか？ 四〇チョイだと……」

本気で一郎はそう思っていた。実際、夫人は四〇位に見える。それは内なる声が精神だけではなく体にも作用していることと、それに動かされて多くの男たちと多くの行為を行っていることによる影響である。

しかし、さすがに孫がいる女性相手に四〇チョイでは、と本気で思うのは抜けている。

が、そういう間抜けさを歓迎しない女性はいない。

ポ、と顔を赤らめる婦人。

「あらあ……もう、こんなおばちゃん喜ばせてどうするの？ そりゃ、オッパイは大きいですけどね？」

「あっ」

一郎の胸に押し付けられる爆乳。ドキンと心臓が爆発する

顔を赤らめ、腰を引く。

「あ、やだ……本当に？ ごめんね、こんなおばちゃんに……うれしいけど」

「いや、ほんと……違いますって、立ってませんし」

「うん、わかってるわ。立ってない。私、向こう向くから……その間にね、一郎くんもそっち向いてさ」

「あ、はい」

背を向ける爆乳熟女。腕の横から乳房が見える。

唾をのみつつ、背を向けてズボンを緩める。三〇越えの巨棒だ。パンツの上の所から出し、腹、へそ、胸まで届く。上着をぶかぶかにしてごまかすしかない。

と、足音を消し、夫人が一郎の前に回り込む。

「あらあ」

「え、うわっ」

「ウッソ……ヤダ……ご立派な大物で」

体を強張らせる一郎。

そのシャツを摘んで持ち上げ、突き立つ一物を剥き出す。

目を剥く夫人。

「お、おおおおお。私の腕より明らかに太いわねえ」

「いや、これは……」

ペロリ、と唇を舐める熟女。

「うふふ……これはもう、スイッチ入っちゃったわ。我慢できないわよ、こんな目の前でギン立ちさせられたら」

「いや、これは……あっ」

上着。

脱ぎ捨てる熟女。巨大なカップのブラも床に落とす。

「うふふ、セックスしましょ。おばちゃんがぜーんぶ教えてあげるわよ……童貞クン」

髪をかき上げ、ブルンと爆乳をあえて大きさに揺らし、背中を反らせて突き出す。

若い女と違って腹や二の腕に肉が付いているのが生きた人間であることを強烈に感じさせて余計に情欲を掻き立てる。

抱き着きたい。

爆乳を揉み解し、舐め回し、押し倒して下着をはぎ取って巨棒の筆下ろしがしたい。兄嫁の妹を作りたい。

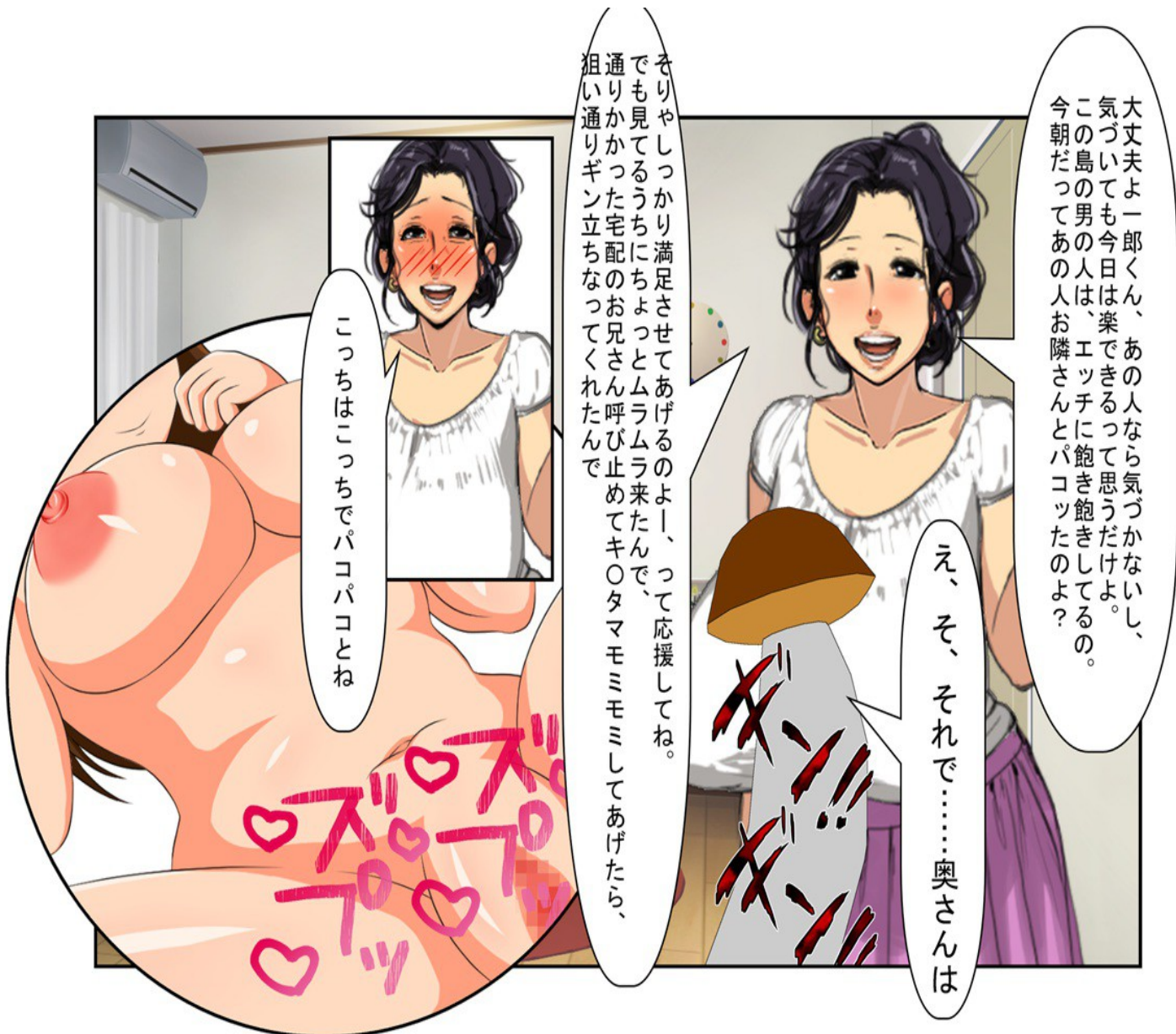
そう強烈に感じる一郎。

——でも、ダメだ。隣の家に旦那さんもいるんだぞ。

「大丈夫よ一郎くん、あの人なら気づかないし、気づいても今日は楽できるって思うだけよ。この島の男の人は、エッチに飽き飽きしてるの。今朝だってあの人お隣さんとパコツたのよ？」

「え、そ、それで……奥さんは」

「そりゃしっかり満足させてあげるのよー、って応援してね。でも見てるうちにちょっとムラムラ来たんで、通りかかった宅配のお兄さん呼び止めてキ○タマモミモミしてあげたら、狙い通りギン立ちなってくれたんで、こっちはこっちでパコパコとね」



「え、え」

目を白黒させる一郎。

意味不明だ。あまりにも無茶苦茶な話。

——でも、嘘ついてる感じじゃないし。こんな嘘、意味わからないし。そういうふうに女の人が無茶苦茶求めてくる島だって言うなら……旦那さんがなんか、ヒョロヒョロっていうか、弱ってる感じなのも疲れてるからってり理由が……

「あう！」

ギュム、と夫人の手が一郎の巨棒の根元、ぶら下がる肉袋を握る。

「んー……うふふ、こっちも大きいわ。こっちがデカイほうが、この島じゃ喜ばれるのよ。もちろんデカチン〇ンもみんな大好きだけど、租チン〇ンも普通に大好きだし……チン〇ンならなんでもいいの、この島の女は博愛主義なのよ。これは誇張ナシの話だけど、この島に住んでる男の人は、全員エッチに不自由しないどころか、疲れ切ってるぐらいなの」

「あうおおお」

グニグニと、肉玉を愛おし気に揉み解す熟女に、爪先立ちの一郎。

「うふ、それじゃ、ちょっと手をこっちに。そう、私のここに当てて」

「は、はい……でも」

引っ張られ、手を熟女の股間に当てる。スカートの下に潜り込ませて下着に直接。チラリと黒い下着が見える。

「はい、わかる？ デ〇チンくん」

「な、なにがですか？」

「お互い同じ体勢なのに、状況は全然違うってことよ、童貞くん」

「そ、それは……」

「なぜかわかる？ それはね、女のお股にゃボールがない、男のお股にゃボールがある。そのわずかな違いが、この絶対的な差を生んでるの。女におキンキンを握られたら、男は言いなりになるしかないのよ。わかった？」

「わ、わかりました」

「それじゃ、顔近づけて、そう、それで舌を出す」

「え……おっ」

「ん……べろろん」

顔を突き出し、舌を出す一郎。熟女も同じようにして、相手の舌を舐める。

空中で絡み合う舌。舐め合うわけではなく、熟女が一方向的に舐め上げる。目を見開く一郎。

「あっ……」

溶ける。舌から脳が溶け出すかと思った。

金松夫人は手の中の巨玉がギュッと引き締まるので、恐怖を感じたのかと一瞬誤認する。だが上に引きあがっただけだとすぐにわかる。

——やだ、もうイキそう？ ベロチューで？ 初心ねえー、可愛い……お姉さんキ〇タマ空っぽにしちゃうぞー。って、まあ元から空っぽにする一択だったんだけどね。

一瞬のことである、べろべろと舌を舐められ、あまりの感覚にいきそうになりつつも次の瞬間舌を口の中に引き戻す。

「あ、あ……」

「うふふ、ベロチュー初めて？」

「は、は……」

——初めて……っていうか、こんなキスあるのか……っていうか、これキスか？ うわ、なんださっきの感覚、頭おかしくなる、ただ舐められるだけでアレ……あんなのお互い、舐めあうんだよね？ そんなことしたら出ちゃう……お、女の人に入れるのは想像しない日はなかったけど……こんなことするなんて、こんな技があるなんて、知りもしなかった……

「うふふ、ベロチューは気持ちいいぞ。一郎くんも舐めてきなよ。うふふ、でもこれの一番いいところは……いくら気持ちよくても……」

「気持ちよくても？ はうっ」

きゅっきゅ、と肉玉をリズムカルに揉み上げる熟女。

「あ、ちょ、おおお」

「これの中身は出ないってこと。イキそうになっても、やっぱりおニンニンへの刺激なしじゃいけないから……楽しめるってことね。それじゃ」

顔を突き出し、再び舌を出す。

唾を飲んでから、一郎も同じようにする。

舐められ、自分も舐め返す。

鼻息荒く求めあう二人。棒立ちの一郎を、キュッと握っているモノを引くことで引き寄せる熟女。

空いている手を一郎の胸元に滑り込ませ、服を脱がす動きをする。気づき、舌を絡めながら脱ぐ一郎。

裸の胸と胸。締まりのない一郎の胸元に爆乳が溶けて広がる。

熱い息。

——だめだ、この人には旦那さんが、隣の家。つながってる、三世帯住宅だから。兄ちゃんたちだっているんだ……だから……こんなことしちゃだめだ、理性を保つんだ。

熟女を抱きしめ、股間を押し付ける。腰が本能で前後する。擦り付ける。もう考える事と関係なく体が動いていた。

押し付けられる巨棒を感じてにんまり笑いつつ、息継ぎに頭を離す熟女。

「ぶはっ……は、激しいわね一郎くん、うれしい。こんなおばちゃんに……」

とろんとした瞳、すっかり出来上がったメス顔でさほど身長も変わらない一郎の顔を見上げる。涎が唇から喉に伝う。

「お、奥さん……僕もう……」

「うふふ、もちろんオッケーオッケーよ。さっきも言ったけど、この島ではこういうの全然オッケーなの。あの人も何の文句もないし、むしろ君がしてくれたら今晚は楽できるって話よ。うふふ、もちろんあの人のタマタマ袋もどっちみちタマ切れにするんだけどね、出ない状態でもさらに……ってのはさすがにナシになるっていうか……」

「そうですか、それならいいかな」

夫人の話はとてもではないが納得できる話ではない。

実際には本当の話なのだが、とても島の外の人間がそうですかといえるものではなかった。

だが、もはや一郎は股間の猛りを解放することが最優先の生き物になりつつあった。

——行ける行ける、よくわからないけど奥さんがそういうんなら行ける。大体気づかれなきゃなんだって行けるんだし。大体もうやりたくて仕方ないし。やるぞやるぞ！ 奥さんのおマ○コにぶち込んでやるぜ！ 気づかれないからセーフ、気づかれないからセーフ！

「じゃ、ベッドまで急いで」

「うふふ、一郎くん、エッチの前にはお風呂が基本よ」

「あ、そうなんですか」

「そりゃそうよ、お風呂で洗ってからでないとお互いいろいろね……」

しゃがみ、爆乳を左右に広げ、巨肉棒を挟み込む。

「あっ」

「うふふ、どんな大物だろうが飲み込む私の自慢のオッパイの大海。にもかかわらず、あらまー、大きい！ 一郎くんのおチン○ン大きいわねー！ オッパイの谷間から、先っぽどころか普通の巨根並ののがよっきり出てるわ！ 長い長ーい！ どんだけ長いのよー、あの人はもちろん、今まで一番大きかった人でも届かなかったところまで余裕で届いちゃうよこんなの。うふ、今まで誰も届かなかった、奥の奥まで犯してね？」

「も、もちろん……早くお風呂に……あ」

舌。

ベロンと顎を舐めようとするかのように垂らす熟女。それを見下ろし、これから彼女がするかもしれないことに唾を飲む一郎。

——こ、これはまさか、舐めてくれる？ でもまだ風呂に入っていないし……

「うふふ、お風呂に入っていないといろいろまずいけど、ちょっと味見ぐらいならいいよね？ というわけで、巨根くんだけが受けられる至高の技……これがフェラパイズリよーと、こんなふうに、ベロンと」

「はうっ」

仰け反る。思わず下がる、が、後ろは壁。位置を把握して熟女は動いていた。

左右から乳圧、押さえ、持ち上げ、下ろしてまた上げる。重過ぎる爆乳を、匠の技で操り男のシンボルをしごき上げる。同時にベロンベロンと巨棒を舐め上げる。

「ほーれベロベロー、お風呂入らないと、こんな風に舐め舐めするのを躊躇する子もいるからね、普通なら入らないと。私は割と平気だから味見を……というか我慢できないから、とりあえず駆けつけ何発か抜かせてもらいますわ。味見味見」

ちゅ、と巨棒の先にキスして、唇を広げる。腕より太いアナコンダ、それでも鍛え上げた美地島女子は間抜けな大口を開けて啞え込む。大口だと歯が当りそうだが、巧みに唇で保護する。

そしてヌポヌポと頭を上下させ、絞る。

絞りつつ、乳圧男根挟み責めも忘れない。

「あああああ、ちょ、ちょ、緩めて、出ちゃう、出ちゃうあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっ！」

腰を突き出す一郎。脳が溶けて一物から噴き出すかと思えるほどの快感に膝が震える。

大量の粘液の放出にも、乳房に当たる肉玉が引きあがっているのを感じていた熟練の熟女は舌で受け止めて泰然たるもの。

出し終わると、ヌポッとわざと音を立てて口を離す。膝をつき、爆乳に挟んだまま見上げる熟女。

「ぶっはあああ、アゴ疲れるわあ。でも、この疲れるのがいいのよね、今自分とエッチしてる相手が、雄として上等だって分かせられる感じでね」

「は、早く出しちゃってすいません……」

「いいのよ。気持ちよくなってくれて嬉しいわ。で、べー」

「え、あっ」

突き出された舌。とても乗り切らない大量の白濁液、舌で掬い上げたものが左右から歯に、舌の奥側にと垂れていくのが見える。ニマッと笑い、口を閉じ、喉を鳴らす。

「ん……ぷはああ、濃いわあ。口から飲んでも妊娠しそう。キ〇タマ汁まで規格外……ほんといい子連れて来てくれたわ」

「そんな」

「謙遜しないで。今出したばっかなのにまだチン〇ンビンビンだし。ほんと凄いわ。でっかいしね。ここだけの話……これ、絶対ほかの男の人に言っちゃだめよ？」

「え？ なんです？」

「女なら誰でも知ってることだけど……おチン〇ン大きいほうが、エッチは気持ちいいの。君のとできるって思うだけで、もうお姉さん濡れ濡れよ」

「そ、そうなんですか」

目を逸らす一郎。

——いやいや、嘘だろ。そんなの、聞いている話と違いすぎる。僕のが大きいから、喜ばせようとしてるんだ。でも、もしかしたら、いやいや……でも、嘘でも嬉しいから、ちょっとにやけちゃう。

思わず頬が緩む。それを見つつ話す熟女。

「そうよ、みんな隠してるけどね。小さい人がかわいそうだから」

——もちろん、小さい相手には大ききなんて意味がないって言うわ。相手が喜ぶことを適当に言う女の嗜み、テクニックってだけ。並の大ききの人にはちょっと大ききめねー、とかさりげなくいったりね。大ききこーん、なんていうのはさすがに嘘丸出しでアレだけど。うふふ、この子も明らかに喜んでくれる。いいわよいいわよー、盛り上がっていきましょね。キ〇タマ空っぽにしてあげるからねー。

その場に座る。

「それじゃ、一郎くんもしゃがんで」

「は、はい」

「あは、自分ので顔隠せそう、ほんと大きい。おキンキンも床についちゃいそう。一郎くんが雄として優秀だから……」

「あっ、うわ」

くい、と黒い下着の前をずらし、女の部分を見せ付ける。

じつりと濡れた女の花園。赤黒いバラの花びらが蜜で艶々光る。綺麗などといえるわけがない内臓その物の姿であるが、一郎は完全に目を釘付けにされる。上で息をするたびにプルプル揺れる爆乳にさえ目がいかない。

「うわあ……これが女の人の……綺麗ですよ」

「ああーん、ありがとうね。でも、綺麗だけじゃなくて、子供も産んでる強いおマンマンなのよ？ 君のその、最強おチン〇ンでも受け入れられるぐらいね。さあ……」

くばあ、と広げて見せる。

「こんなおばちゃんでもよかったら、今ここで、君の童貞もらいたいな」

「奥さんだからこそ、お願いしたいですよ。美人だし、オッパイ大きいし……」

「うふふ、先っぽここに当てて……グイッと腰を前に……ん、あ、ちょ、ちょっときついかも……ちょっと止め、あ、止め、止めおおおおおおお！ 入って、お、おおおお！ すっご、広がる、広がって……おおおおお！ ちょ、そこまで、そこまで入っても……おおおっ！」

ぬぶぶぶぶぶぶぶぶぶ、パン、一気に腰を押し込み、股間と股間、肉がぶつかる音。

ピン、と伸ばされる熟女の足、指先まで引きつり、ヒクヒクと痙攣する。膝立ちの一郎、肉の弛んだ太ももの間で巨玉がゆさゆさ。

歯を食いしばり、目を見開く熟女。

「ふ、んぐうううう」

「ああ……締まる、奥さんのおマ○コ締まるっ」

「くふうう」

——私のが締まるというより一郎くんのが超絶ぶっというだけだけど……まあ鍛えてるから締まるほうだとは思うけど。っていうかこれフィスト以上じゃね！？ サイズ的には……マンマンへの挿入用臓器であるチン○ンだから入るけど、同じぐらいの大きさの手じゃ絶対無理っしょこれ……百戦錬磨のこの私が、入れられただけで声も出ないとか、ほんと種馬としての気分……こんな子がうちに下宿って夢みたい……楽しむぞー。

「い、一郎くん、童貞卒業おめで……あ、ちょ、ちょおおおお！」

腰を引く、押す。

「あああ、ヌルヌルの穴気持ち良すぎて腰が勝手に動く動くっ……僕エッチしてる、信じられない。しかもこんな美人と……僕エッチしてるんだ……」

「そうよっ、きよ、あうっ、あうっ、巨根でしてるの、エッチしてるの。こんな……うふん、美人とね？ あんっ、あんんんっ……」

「んは、んは……マ○コいい、マ○コいい……こんな美人とエッチできるなんて……うう、僕なんか一生エッチ自体無理かもって……」

目を潤ませ、顔をくしゃくしゃにする一郎。頭の上だけは感動、下は一心不乱にピストンするだけの生き物と化している。

巨大な肉団子を股の間でブルンブルンと揺らし、腰を振る。

超巨根の中でもさらに上位陣だろう巨大すぎる男のシンボルで百戦錬磨の雌穴をズニユズニユズと粘っこい音を立てて擦る。

高低差の激しい先端部が熟女の中で動くと、大量の空気が漏れるブリュブリュという卑猥な音になる。

そして、肉と肉がぶつかるパンパンという乾いた音。

お互いの汗が交じり合うと、より音が響くようになる。

それを聞きつつ、夫人は少年の頭を撫でる。

「童貞卒業おめでとう一郎くん。ずっとこの島にいるといいわ……」

微笑む夫人。内心は怒りに震えていた。

——やっぱり外はおかしいわ。この子は確かに見た目は全然よくないけど、世の中の女がみんな美人でモデルみたいなの？ そんなことないでしょ？ 馬鹿な高望みして見た目のいい一部の男に群がって、それで年取ったら捨てられて無事死亡？ 外の女が馬鹿だからこんな罪のない子が、一生セックスもできないかもなんて、この年で思わされる。外の間人は、この島の女をおかしいって思うらしいけど、おかしいのは外の連中よ。こんなちゃんとした、一人前の男の価値を認めないようなところにはもう帰さない。この島にいれば、この子も幸せ、この子の周りの女もこの大物で楽しめて幸せなんだから……

「うふふ、我慢するのよ。せっかくの初エッチなんだから、我慢して我慢して、おもっくそ気持ちいいのだすのよー」

——へこへこパコパコ、男なんて可愛いもんよ。誰でも同じ。それを、外じゃ恋愛できる男って上位の二割程度だって学校で習って……旦那探しに外に出たら、実際そんな感じで……。馬鹿らしいわ、この子もイケメンも同じよ、同じ。イケメンは女性ホルモン多いからモノがお粗末な人が多いけど、

実際のところ大きいも小さいもないわ。いや、この子のはちょっと規格外だから多少プラスだけど…大体は同じ。顔が悪かろうが、チン○ン小さかろうが、こうやって最終的にパコるところまで来たらみんな同じようにお尻へコへコよ、それを上っ面で差別して……くだらない。外は本当にくくだらないわ、こんなかわいい子に……一生できないかもなんて思わせて……狂ってる、絶対許せない。おかしいのは外よ、この島じゃないわ。

「ふぐっ、ふぐっううう、き、気持ちいい……奥さんの中、気持ち良すぎる……」

「覚悟しなさい。今日から君のキ○タマは毎日空っぽになるのよ。あっ、あん……島の女は皆、おチン○ン全部が平等に大好きだからね……あっ、そこそこ……あっ……。毎日一杯エッチして、外のことなんか忘れて、幸せになるのよ、ああんっ、奥まで届くっ！」

爆乳に突っ伏した少年の頭を優しく撫でつつ、若い雄のピストン運動のすべてを受け入れる熟女。爆乳に涎と汗と、涙が擦り付けられる。

——何の罪もない男の子が、たかがセックスするぐらいで。涙を流す。自分には一生無理だと思ってたから……酷い話、こっちまで泣けてくるわ。この子は絶対この島で幸せにならなきゃならない。同じような立場で、同じように絶望してる子たちの分まで……

いよいよピストンが激しくなってくる一郎を、力強く抱きしめる夫人。

体験版終わり

この後も一郎は夫人や周りの家の主婦たち、何の接点もない宅配員の女性らと次々とやりまくります。

男というだけでやりまくれる島……

続きは製品版でぜひお楽しみください